

道徳科 「よりよい未来を『そうぞう』するための道徳科の授業づくり
～自己を見つめ、自己の生き方を考える道徳科のカリキュラム開発～

寺西 克倫

1. 道徳科における未来そうぞう

(1)めざす子ども像

道徳科では、「よりよい未来を『そうぞう』するための道徳性」を養うために、道徳的諸価値の理解をもとに、物事を多面的・多角的に考えながら、自己の生き方についての考えを深めていく学習を行っている。この学習で養う道徳性とは、道徳的な判断力、道徳的な心情、道徳的な実践意欲と態度の要素で構成される道徳的諸様相である。道徳科での学習は、自分自身で道を切り開き、前を向いて生きていく力を育んでいく未来そうぞう科の学習過程（現状を把握した上で、その現状がよりのぞましいものへと変容した姿を思い描く「想像」と、新しく行動をおこしたり、新しいものを生み出したりする「創造」を繰り返しながら対象に対して向き合っていくプロセス）と同様である。つまり、道徳科と未来そうぞう科は、よりよい自分や生き方への見通しをもち、それらを実現するための課題を考え、実践することへの意欲と態度が養われるという点では同様である。

そこで、道徳科における「めざす子ども像」は、「よりよい未来のために、道徳的諸価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止め、その解決と実現に向けて、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める姿」と考える。

(2)道徳科がになう3つの資質・能力

未来そうぞうで道徳科が育成すべき3つの資質・能力につながる姿について、以下のような道徳性を養っていく。

| | |
|-------------------|--|
| 主体的実践力に 発揮される姿 | 自己の生き方についての考えを深めるために、様々な道徳的諸価値に関する問題を自分事として受け止め、自律的に判断したり、粘り強く問題を解決したりしようとする道徳性。 |
| 協働的実践力に 発揮される姿 | 他者との関わりや集団や社会との関わりの中で、自らが他者と共によりよく生きようとするために、他者の多様な考え方や感じ方に触れて、よりよい集団や社会の形成につながる道徳性。 |
| 創造的実践力に 発揮される姿 | よりよい未来を「そうぞう」するために、道徳的諸価値に関する問題について、人間としてのよりよい解決を行うために、自分の意志や判断に基づいて自己実現を図っていこうとする道徳性。 |

2. 道徳科において、「未来を『そうぞう』する子ども」を育むための手立て

(1)未来そうぞう科につながる道徳科のカリキュラム開発

「未来を『そうぞう』する子ども」の育成に向けて、答えのない問題にも納得し合える最善策を導き出す力や、習得した知識や技能を別の場面でも効果的に汎用できる力が必要になってくる。道徳科の時間は、未来そうぞう科の活動における課題を解決する話し合いのための時間ではないが、道徳科と未来そうぞう科の学習過程の考え方学びのプロセスは同じであるので、道徳科で考えたことを未来そうぞう科で活かしたり、未来そうぞう科での活動を道徳科で振り返ったりすることは可能である。具体的には、道徳科の時間に道徳的価値について考えたことや自己を振り返ったことを、未来そうぞう科の内容につな

げていくことができる。

道徳科の時間に、登場人物の心情や行動の根拠、道徳的価値について自分との関わりにおいて考えることによって、生き方についての考えを深めていくことができる。そして、道徳的な判断力、道徳的な心情、道徳的な実践意欲と態度が生まれ、「よりよい未来を『そうぞう』するための道徳性」を養っていきける。この一連の学習で、登場人物の心情などを想像することで、未来そうぞう科での具体的な活動の「想像」につながることも出てくるだろう。また、道徳科の時間に、道徳的価値についての問題を多面的・多角的に考えると、道徳的な判断力が生まれ、未来そうぞう科で実践する「創造」の活動が充実したものになってくるだろう。

このように、道徳的問題を意識したり、道徳的な実践意欲と態度を表現する場を想定したりできるカリキュラム開発を行うことで、道徳科の時間に深めた道徳的価値について理解したことや、道徳科で想像力を働かせて考えたことが、未来そうぞう科での幅広い活動につながっていくと考える。未来そうぞう科で、社会や世界と関わろうとしたり、これからの生活に活かしてよりよい人生を送ろうとしたりする活動が具体的な実践の場となる。そのため、未来そうぞう科の学習計画と道徳科の時間を関連づけることで、道徳科の時間に考えた解決方法を実践する場を意識することができ、道徳的な実践意欲と態度をより育むことができると考える。

(2)道徳科の授業づくり

前述のカリキュラムづくりの中で、道徳科では、自己を見つめ、自己の生き方を考えていく学習を通して、一人ひとりが道徳的課題に主体的に関わり、それぞれの道徳的課題を解決していくことが求められる。そのためには、道徳的に考えたり判断したりできる力を育成できるような授業づくりが大切である。本年度は、①自分事として受け止める「場」の工夫、②考えを整理し、道徳的価値の理解を深められるような板書、③ねらいにせまる発問づくりを手立てとして研究を進めてきた。

①自分事として受け止める「場」の工夫

道徳的な「学び」の場として、道徳科では、学習者である子どもが「教材」「自分」「他者」と対話しながら、自己の生き方についての考えを深めて、納得解を見出せるようにする。

まず、「教材」である読み物から、道徳的価値に関わる問題を把握する。その問題場面では、登場人物の立場に自らを置き換えて考えたり、登場人物の心情や行動を分析して考えたりして、自分の道徳的価値を客観的に見つめていく。この思考の中では、これまでの自分の経験やその時の感じ方、考え方と照らし合わせることで、さらに価値の理解や自分の考えを深められるようにする。

また、解決に向けての自分の考えを整理したりまとめたりすることができたら、友だちと意見を交流し合う。多様な価値観の存在を前提に他者と対話したり協働したりすることで、物事を多面的・多角的に考え、「新たな考え方が分かった」ということを増やしていく。ここでは、1つの答えを求めたり決めたりするのではなく、様々な視点から物事を理解することで、主体的に学習に取り組めるようにする。

このように、他者と関わりながら対話的に考えることを通して、互いに望ましさを共有し合うために一人ひとりの子どもが考え、他者と共有し合った道徳的な望ましさを、自分事としてどのように受け止めるのかという納得解を紡いでいく学習づくりをしていく。

②考えを整理し、道徳的価値の理解を深められるような板書

子どもたちにとって、視覚的に自らの考えを整理し、自分事としてさらに考えたり、道徳的価値の理解を深めたり、物事を多面的・多角的に考えたりできる道具が板書である。そのため、自己を見つめたり思

考を深めたりするために、板書を効果的に活かしていく。

具体的には、本時の学習で、最も考えさせたいところ（話し合わせたいところ）を中心に板書を構成するようにして、登場人物（主人公）の考えの変容などを対比し、心の動きが分かる構造的な板書を考えていく。そうすることで、1時間のねらいである道徳的価値が明確になり、子どもたちはその価値についての理解を深めやすくなったり、自分の考えと比べて、様々な視点から物事を考えやすくなったりする。また、多様な意見が出る場合は、似たような意見をまとめたり、対立する意見を際立たせたりするなど、視覚的に整理することで、後で振り返った時に、友だちの意見と照らし合わせて、自らの考えを整理することができるようになる。

③ねらいにせまる発問づくり

道徳科の時間に、道徳的価値の理解をもとに、自己の生き方についての考えを主体的に深めていくためには、子ども自身が問いを持ち、課題解決の流れが大事にされた授業展開が重要である。そのためには、発問について考えることが不可欠である。

まず、発問の対象をよく吟味しながら、「場面発問」と「テーマ発問」を効果的に使っていく。読み物教材から道徳的価値が含まれる問題を考えるためには、登場人物の気持ちや考えを問うばかりではなく、教材の問題場面を捉えたり、登場人物に自らを投影して心情を考えたりしていくことが必要である。また、人物のあり方（生き方）とそれに対する考えや、教材のテーマとそれに対する考えを問うことで、道徳的価値のねらいに迫り、生き方についての考えを深めていくことができる。さらに、ねらいとする価値そのものについて問うことで、自己を見つめることにつなげていくことができる。

また、主人公に対する多様な立ち位置を意識しながら、発問を組み立てていくことも必要である。主人公の側で考えるのか、客観的に見るのか、主人公の考えを明らかにするのか、自分の考えを明らかにするのかという組み合わせ¹⁾やその違いを認識することで、どのように問うのかが変わってくる。具体的には、登場人物への自我関与を促すように「共感的に」問うことは、具体的な事例を取り上げて人間理解を深めていきやすくなる。また、登場人物の考えや行動の理由や根拠を「分析的に」問うことは、ねらいに迫っていくことができる。また、もし自分だったらと登場人物に「投影的に」問うことは、登場人物の考えや行動に対して客観的な視点から考えることができる。そして、登場人物を客観的に見ながら立場を明確にして「批判的に」問うことは、登場人物の立場をはっきりさせて自分の考えを明らかにして考えることができる。

3. 道徳科における評価について

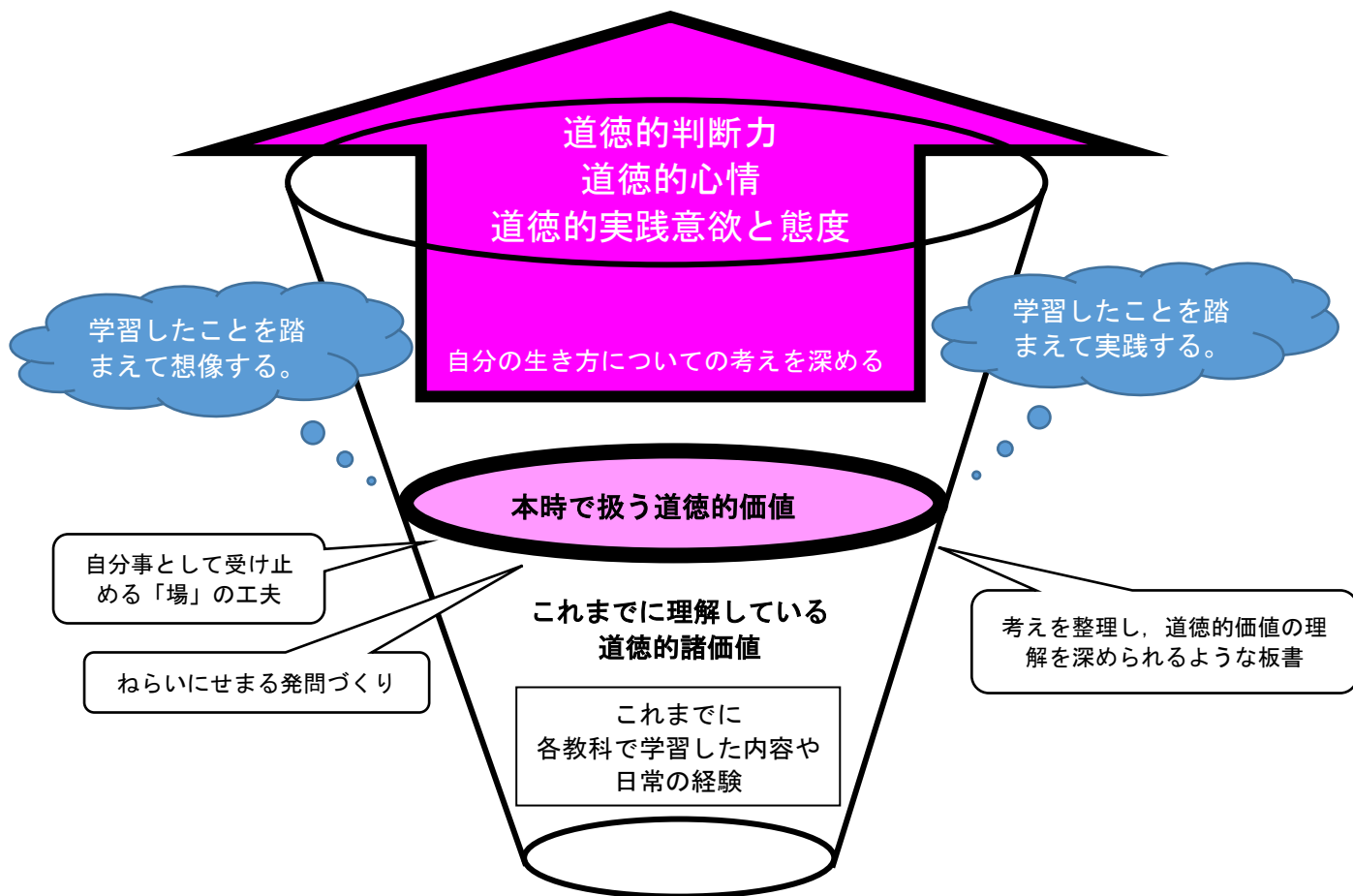
道徳科の評価は、「人格的資質を形成する道徳性の成長させる学びを見取る」という評価の側面がある。道徳性は、あくまでも個性的なものであり、外からでは推し量れない個の内面に形成される資質・能力である。学習展開のどの部分でどのような学びを配置するかという授業デザインと、子どもの学びをどのように見取っていくのかという授業評価の観点が必要になってくる。²⁾ 評価の観点を明確にするためには、授業のねらいがより具体的でなければならない。

評価をするにあたっては、次の2つの視点に着目して評価する。1つ目として、話し合い活動を通して、一面的な見方から多面的・多角的な考え方に発展しているかという点であり、2つ目として、自分自身の道徳的価値の理解を深めているかという点である。これらの観点について評価していくために、道徳的な問題を解決するための話し合いの発問部分に自分の考えをワークシートに書くようにする。また、

学習の終わりには、1時間の学習でどんなことが分かったのかを書くようにする。このようにすることで、その道徳的価値に対する考え方や捉え方がどのように変容したのかについて、ポートフォリオで評価することができる。そして、学習のねらいをもとに、1時間の学習で子どもがどんなことを考えたのか、どんなことが分かったのかを評価する。

4. 道徳科の全体構想図

よりよい未来を「そうぞう」するための道徳性の育成



【引用文献】

- 1) 永田繁雄「道徳教育 2014年8月号」, 明治図書, 2014, p.4~p.6.
- 2) 田沼茂紀編「道徳科授業のつくり方 パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価」, 東洋館出版, 2017年8月.p.114.

【参考文献】

- ・ 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門会議「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」, 2016年7月.
- ・ 永田繁雄編「『道徳科』評価の考え方・進め方」, 教育開発研究所, 2017年6月.
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』, 2017年6月.
- ・ 和井内良樹「道徳教育 2017 10月号」, 明治図書, p.4~p.6.
- ・ 赤堀博行「『特別の教科 道徳』で大切なこと」, 東洋館出版, 2017年11月.
- ・ 坂本哲彦「小学校 新学習指導要領 道徳の授業づくり」, 明治図書, 2018年4月.